

2024年7月14日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教1 「初めに言があった」

創世記1：1～5、ヨハネ1：1～5

「初めに言があった」ヨハネ福音書は、この言葉から始まります。ここは創世記の冒頭「初めに、神は天地を創造された」(1：1)この部分との深いつながりがあります。英語の聖書では、この二つの聖書の始まりは同じ言葉「In the beginning」です。ギリシア語でもヨハネ福音書の冒頭と創世記(七十人訳)の冒頭は「エン・アルケー」と同じ言葉です。つまりここでヨハネ福音書は、創世記の天地創造から話を始めています。ですから、この「初め」は、天地創造の初め、世界の初めです。これは他の福音書にはない始まり方です。

その天地創造の初めに「言」があったと言います。この「言」と訳されている言葉は、ロゴスという言葉です。この後2節以下では、「言」と訳されている部分は、いずれも「この人」とか「彼」と訳す言葉になります。つまりこのロゴスが指し示しているお方がいるのです。それがよくわかるのがこの後の「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」(1：14)です。それは受肉された神さまの独り子であるイエスさまに他なりません。イエスさまが天地創造の初めからおられる。父なる神さまと共に、真の神さまとして、この天地創造の御業に携わっておられる。「万物は言によって成った」と言います。この世界はイエスさまによってできたのです。

さらに4節「言の内に命があった」イエスさまの内に命がある。それは人間を本当の意味で生かす命です。天地創造の物語でも、人間の創造のところで神さまが命の息を吹き入れるところがあります。命の息を吹き入れられて「人は生きるものとなった」(創世記2：7)のです。この「命の息」の命も「言の内に命があった」の命もギリシア語では同じ言葉です。興味深いのは、この福音書の最後、よみがえりのイエスさまが弟子たちに現れたとき、息を吹きかけて「聖霊を受けなさい」(20：22)と言われるところがあります。よみがえりのイエスさまがもう一度命の息を吹き入れるのです。まるで創世記の物語のように。さらに、5節「光は暗闇の中で輝いている」ここには光と闇が出てきますが、創世記のところにも光と闇が出てきました。

このように見てくると、ヨハネ福音書が、冒頭から創世記の天地創造の御言葉をいかに意識しているのかが分かります。まるで創世記からイエスさまの救いを語り直しているかのようです。イエスさまが天地創造の初めからおられ、この世界を造られ、そして人間に命の息を吹き入れられた。そして「光あれ」とこの闇の世を照らす光としてイエスさまが到来された。まるであの天地創造の物語が、イエスさまの物語であるかのように。

一昔前は、この福音書の読者、読み手は異邦人ではないかという説が有力でした。それは、この福音書にギリシア的な表現が多いということが理由でした。けれども今日ではあまりそのようには読みません。むしろユダヤ人に向けて書かれたと考えられています。この福音書が書かれた時代は、紀元80～90年代と言われています。この時代は、ユダヤ教からキリスト教が正式に異端として退けられ、それによりローマ帝国による迫害もいよいよ激しくなっていく時代でした。そういう中で、教会は、ユダヤ人たちが求めていたメシア、救い主こそ、実はイエスさまであることを伝えようとしたのです。何とかして、ユダヤ人にイエスさまの救いを伝えたい。この冒頭の部分からもすでにその熱意が伝わってきます。

ユダヤ教の立場からすれば、イエスさまは、突如として現れた印象がありました。急に後から出てきて、この人が神さまであり、メシアであると言われてもなかなか信用できない。我々には、天地創造の初めからの歴史がある。アブラハム、イサク、ヤコブの神の民の系譜がある。ユダヤ人にはそういう自負がありました。けれども、その歴史の初めからイエスさまがおられ、イエスさまによってこの天地万物は造られたと福音書は語ります。このことはユダヤ人にしてみれば大きな挑戦であり、これまでの価値観をひっくり返されるようなことでした。

でも信仰とは、そういうものではないでしょうか。聖書の伝える救いは、罪のわたしが一度死んで、新しく生まれ変わることだからです。この後、3章にはニコデモというユダヤ人の議員がイエスさまのところに来る話があります。何か悩んでいたのでしょうか。イエスさまはニコデモに「人は新たに生まれなければ神の国を見ることはできない」(3:3)と言われます。ユダヤ人が一生懸命追い求めているけれども見えてこない世界がある。でもこれまでの常識や価値観が打ち砕かれ、ひっくり返されて、見えなかったことが見えてくる。これまでつながらなかったことがつながってくる。「わたしは道である」(14:6)と言われたイエスさまが、すべてを見えるようにしてくださるのです。

人生には、なかなか答えが出せないことがあります。アイデンティティー・クライシスという言葉があります。「自己喪失」とも言われますが、人生において、様々な経験をする中で、生きる意味、目的を見出せなくなることがあります。失敗や挫折を経験して途方に暮れてしまう。あるいは事故や病気を経験して、辛く不安な日々を過ごすことがあります。愛する人を亡くす悲しみがあります。年老いて、仕事をリタイアした途端に、自分は社会から必要とされていないのではないかと感じて悩む人もいるでしょう。人生にそういう危機、悩みは尽きません。このような人生の問いにだれが答えてくれるのでしょうか。

神さまが、その問いに答えています。「初めに言があった」神さまがすべての根拠、はじまりです。そこには「言」、すべてをお造りになられた神さまの強いご意志があります。パウロは次のように言います。「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。」(エフェソの信徒への手紙1:4~5) この世界が造られる前から、神さまの深いご計画の中にわたしたちは置かれています。それを教会の言葉で「摂理」と言います。どのような試練の中にあっても、それでも神さまは、わたしたちを見捨てずに、愛して、神の子にしようとすでにお決めになられている。そしてそのために神さまは、救い主としてイエスさまをくださいました。イエスさまこそ神さまの御意志であり、答えです。なかなか先の見えない時代にあって、その光のもとに歩む人生は何と幸いなことでしょう。

天の父よ。今日からこのヨハネによる福音書を読み始めます。悩みの尽きない人生です。なかなか答えが見出せないで苦しみます。それでもあなたが強い御意志を持って、わたしたちの人生を始めさせ、完成へと導いてくださることを信じます。そのためにイエスさまが与えられました。イエスさまにすべての答えがあります。そのことを御言葉を通していつも示してください。主の御名によって祈ります。アーメン。